

NewsLetter



No. 02

December 2019

対話型協働探索+科学技術イノベーションで小さな農業の新しい可能性を生み出す

ニュースレター

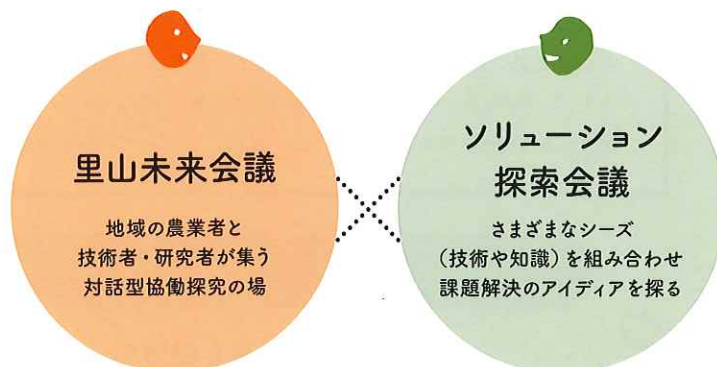
佐渡市・新潟大学「生物多様性と農業技術革新が共存するエコロジカル・コミュニティの実装に向けて：里山創生「佐渡モデル」の構築」プロジェクト

里山農業の未来デザイン

世界農業遺産の島、
佐渡の里山の風景や農業文化を
次世代に繋ぎたい。

このプロジェクトは、佐渡島の小さな農業を支えるために佐渡市と新潟大学がはじめた、生物多様性と農業技術革新が共存する佐渡の里山のみらいのカタチを探る試みです。

ふたつの会議で対話を重ねながら、佐渡の進むべき方向を探っていきます。



プロジェクト参加地域について

活動のきろ



since 2019

新穂潟上集落

次の世代に農地を引き継ぐためにも、今から話し合いを始めよう！という強い思いが語られた新穂潟上集落では、農作業の省力化や米のPR、農作業や機械の共同化についての議論が行われました。また、地域資源を活かした農法にも関心が高いようです。



歌見田地域

来年から多くの人が耕作を断念する可能性があるというショッキングな状況が語られた歌見田地域では、よりよい条件の田んぼを優先的に活用するためにも、ほ場の細かな特徴を整理したい、との声があがりました。ICTを活用した圃場情報の整理を検討します。



第3回

里山未来会議 新穂潟上集落

2019年11月26日(火) 18:30 ~ 20:30

場所 | 潟上集落センター

参加者 | 23名(うち地域農業者11名)

5年後がターニングポイントという声が多く聞かれた今回の会議。農業に従事している人が多い新穂潟上集落も、10年後には誰が農業を継いでいるのか分からないという不安を抱えているとのこと。個人の農業からチームで行う農業へと転換する必要性などが語られました。

「けがや病気をしたときに助け合えるような仲間づくりがしたい」「チームを作ったとしても後継者は必要。外の人を受け入れられる母体にもなりたい」などの意見があがった一方で、チーム化によって小農の幸せは感じられなくなってしまうのではないかと危惧する声も。「自分たちがやりたいのは、やっていて楽しい、面白い、やりがいのある農業」との想いも語られ、新穂潟上にふさわしい連携のあり方を模索する必要



がありそうです。

今回の会議では、前回までに話題にあがった「地域資源を活かす潟上農法」を検討するために、潟上のほ場で牛糞堆肥の効果について実験を行っている新潟大学の本間航介さんに話題提供をしていただきました。佐渡では環境農法が一つの特徴となりましたが、窒素の循環を視野に入れて、さらに取り組みを発展させていきたいところです。

2019年11月25日(月) 18:30 ~ 20:30

場所 | 歌見公会堂

参加者 | 23名(うち地域農業者11名)

「若手の後継者がいない限りは地域の農業を存続させるのは難しいのではないか」と、強い危機感を伴う声があがった今回の会議。

先祖代々守ってきた土地を継承したいという想いはあるものの、現状のままでは耕作が途絶え、農地を守ることができないかもしれないと危機感は募ります。若者の農業の参画を促すために、魅力のある農業を考えることが急務です。

もちろん、現役の耕作者の負担を軽減することも重要です。一番大変なのは草刈りとのこと。近年、傾斜地でも使用できるリモコン式草刈り機が開発されていますが、高価であるうえに、石の多い歌見田の畦畔では運転が難しそうです。何かよい方法はないだろうか……悩んだ末に一つの可能性

として話題にあがったのが草を食すヤギとの共生。かつては佐渡でもヤギを飼う家は多かったそうです。ヤギが暮らす棚田の風景は、地域の魅力やお米のブランディングにも繋がるでしょうか!?

東京から佐渡に通い詰めている歌見田ファンのクリエイターの方々も会議に参加。「歌見田には美しい景色があって、それを残すべく農業をされている方々がいらっしゃる。歌見の魅力を外にも伝えたい」と、新たなコラボレーションが始まりそうです。



ソリューション探索

里山未来会議を受けて、ソリューション探索を進めています

ヤギの視察

2019年11月21日(木) 9:00 ~ 12:00

場所 | 新潟大学村松ステーション

棚田地域でのヤギとの共生を模索するため、新潟大学村松ステーションを訪問しました。ヤギはどのような草を好み、どのくらいの量を消費するのか、植生にどのようなインパクトがあるのか、国内の大学ではさまざまな研究が進んでいるとのこと。ヤギのいる農園ではヤギを見るために立ち寄ってくれる人が増えたという話もあつたそうです。



若手農業者の集い

2019年12月10日(火) 18:30 ~ 19:30

場所 | 歌見公会堂

参加者 | 12名(うち歌見集落住民9名)

歌見集落に住む若手農業者と、これからの地域や農業について話し合いました。



お米の販売方法も話題にあがり、ニッチな市場を見つけることや外部との交流が新たな可能性につながるのでは、などのアイデアも話されました。「結果はどうなるか分からないが、来年から工夫をして販売を開始してみよう」との発言もあり、歌見田米販売戦略の検討が始まります。

ICTを活用した農地調査

2019年12月20日(金) 18:30~21:30

場所 | 虫崎ゲストハウス

参加者 | 8名

歌見田地域では、「アグリノート」を使ってほ場情報の整理を始めました。ぬかるみや土質など、各ほ場の特徴や耕作状況を分かりやすく整理していきます。どこにどんな田んぼがあるかパッと見て分かるように、情報を一元化。地域のほ場の全体像を捉え、農業の未来を考えます。



統括プランナーより

科学技術イノベーションと聞くと、集落の日常とかけ離れたことのように感じると、地域の方からたびたび言われます。情報技術やロボットの開発など、革新的技術ばかりに目を向けてしまいがちですが、「イノベーション」の本来の意味は「新結合」。ローテクとハイテク、風土にあった多様な工夫を組み合わせ、新たな価値を生み出す試みを展開したいと考えています。(豊田)



編集後記

地域の関心や議題に個性が出てきて、シーズ探索の幅も広がってきました。科学技術を使って課題の解決をするために技術者に話を伺うことが多い中、牧場にヤギを見に行くことがあると誰が想像していたでしょう……! ヤギ、人懐っこくてとても可愛かったです。視察メンバーの顔も思わずほころびました。(北)



問い合わせ先

新潟大学佐渡自然共生科学センター

tel. 0259-22-3885 (担当 豊田・北) e-mail sado.satoyama@gmail.com

本ニュースレターで報告した活動には、下記団体の皆様に参加・協力いただきました。

農研機構西日本農業研究センター、一般社団法人佐渡生きもの語り研究所、NTT東日本、NTT東日本新潟支店、ミテモ株式会社、トランクデザイン株式会社、サークル鳥っ子、佐渡農業普及指導センター、佐渡自然栽培研究会、佐渡市棚田協議会、佐渡市地域おこし協力隊、新穂潟上集落農業者、歌見田農業者、岩首集落農業者ほか

文部科学省「科学技術イノベーションによる地域社会課題解決」助成事業 発行：佐渡市・新潟大学 編集：新潟大学佐渡自然共生科学センター特任助手 北 愛子

